

わが国における風俗犯罪取締りの史的考察（一）

馬屋原 成男

はしがき

- | | |
|-----------------|---------------------|
| (1) 非犯罪化と猥せつ罪 | (1) 徳川幕府の政治批判に対する制裁 |
| (2) ヒクリンとチャタレイ | (2) 徳川幕府の名譽毀損、不敬 |
| (3) 愛のリコーダー | (3) 徳川幕府の風俗犯とその浮世絵 |
| 一 奈良朝から徳川期まで | 三 徳川時代に発禁になった出版物 |
| 二 徳川幕府の筆禍に対する制裁 | 四 徳川時代における言論出版禁令 |
| | 五 寛政、天保の風俗取締と好色本の禁止 |

はしがき

(1) 終戦後の法感覚の変遷の上で猥せつの感覚ほど稀薄になったものはない。それというのも西独における一九五三年以後、数次にわたる刑法改正草案の非犯罪化の波に乗った特異な猥せつ罪実態の廃止削除を実現し、ビクトリア

わが国における風俗犯罪取締りの史的考察（一）（馬屋原）

王朝時代の一八六八年のヒクリン判例⁽³⁾を墨守した倫理的純潔基準が「チャタレイ夫人」の米・英のつづいた無罪判例⁽⁴⁾によって打破られた影響からである。

(2) わが国もこの種事犯の社会通念の判断基準が次々と崩れ、去る六月八日の愛のコリーダ事件の東京高裁無罪確定⁽⁵⁾によって画期的なものとなった。まさに戦後法の解釈の社会風俗による進化としなければなるまい。

(3) それにしてもいまここまでに至る社会風俗と時代思潮と事物の変遷のあとをたどって猥せつ文書罪の史的考察を試みることにした。微意ひつきよう新らしきを知るためには故きを温ね(温故知新)将来の展望を祈念するにある。

(1) ドイツ刑法典(昭五七年一月法務省刊)一六頁、第四次改正法案、第五次改正法案は北米北欧における性意識の変化と法制的自由化、性表現の規制の後退となり、処罰から不処罰へ、一九六九年七月二二日の連邦裁ファニーヒに判決以来芸術作品の猥せつ性判断は歴史的变化に任ずとの判例が出た(同書二八頁二九頁)

(2) 猥せつ罪の明文化上の非犯罪化(一九六九年九月施行)姦通、(一七二条)同性愛(男性同志)獣姦、姻外性交罪(一七五条)拙著刑法各論二一五頁、削除(同著二四―二五頁)

(3) 一八六八年英国王座市裁判所 Hicklin 判事言渡の猥せつ事件で検察側がチャター事件の時に引き合いに出しているもの拙著前掲書二一八頁二二一頁

(4) 米は一九五九年、英は一九五〇年何れも無罪、拙著刑事法の理念二六五頁、松尾浩也外、現代刑罰法大系(4)(二六一頁拙稿)内田昭文

(5) 昭和五七年六月八日東京高裁大島竹村両名無罪上告なし(確定)

一 奈良朝から徳川期まで

一 わが国における印行出版のはしりは遠く奈良朝のいわゆる写経の目的から始まったとされること西欧における聖書のそれとその軌を同じゅうする。⁽¹⁾ いずれも多衆への布教を目的とする宗教的必要から出たものであることにおいて東西その揆を一にする。

「続日本紀によれば」孝謙天皇の天平宝字八年恵美押勝の乱平定の時、勅命によって、木製の塔百万基を造り、その基台下陀羅尼哭の文句を写した紙片を納めて、神護景靈元年（七六七年）に東大寺におき、次いで宝龜元年（七七〇年）にこれを畿内の十大寺に分置した。

その内現存するものは奈良法隆寺の東円堂内に保管されたもの一万余塔であって、その陀羅尼の文句が紙片いわゆる摺本の様式により印刷してあるという。⁽²⁾ そこで近藤重蔵によれば「本邦の板行は宝龜陀羅尼を最古とす⁽⁴⁾」といっている。

- (1) 小林善八日本出版文化史四六頁
- (2) 小林善八日本出版文化史四七頁
- (3) 一七七一一八二九、一八〇八年書物奉行となる
- (4) 四七頁（鎌倉時代）

それにつづく平安朝に入り、わが国の文藻は、未曾有の開花をみるにおよび、幾多のさん然たる文芸上の作品が世

に出たが印刷出版は頗る振わず、僅かに数種の仏典が残っているにすぎないという。これは永く手による写経や写本でこと足りたからであろう。

その後数百年戦乱相次ぎ、全く出版文化史上の空白時代がつづいた。建長年間に至り板暦が出たのが、奈良朝以来の一段落だとされている(前掲書一六五頁)。

二 さて、わが国中世以前における言論出版取締りに関する法令があったかどうかは、しばらくこれを措くが、わがの筆禍事件の元祖は参議小野篁だとされている。

承和元年従五位下小野篁(八〇二―八五二)は遣唐副使に任ぜられたが(続日本後記)、承和元年正月十九日大使従四位上藤原常嗣と船を争い、病と称して乗船せず「西道謡」⁽⁵⁾を作って遣唐のことを誹謗したため嵯峨天皇の勅勘をこうむり、その官職を免ぜられ同六年一月庶人に落されて隠岐に流されたのがそれである。⁽⁶⁾

(5) 佐伯有清・最後の遣唐使(昭53・10講談社新書六七頁)

(6) わだの原やそしまかけてこぎいでぬと人にはつげよあまのつり舟・小野たかむら朝臣(同著一二頁古今和歌集)天皇はその後一年三ヶ月の後その文才を惜しみ優綫をもって召還官位を復し、後参議にすすむ。同著一三七頁。文章冠絶、彼朝の白楽天に比せられたが、人となり不羈直言を好み世に容れられなかった(平凡社大百科事典2巻八二六頁)

降って、後白河法皇朝の藤原通憲(一一一五―一一五九)は、唐の安祿山⁽⁷⁾の故事を長恨歌と題して二巻の図に作って、これを上覧に供した。時の近衛大将となろうとした藤原信頼を非器その任にあらずとして、彼を安祿山に諷奏したかどで信頼の怨みをうけ、後平治元年通憲はついに斬首獄門に処せられた。⁽⁸⁾

藤原光親は、北条義時討伐の詔書を天皇に代作して、今日でいう詔書偽造の罪（刑法一五四条）で首を斬られている。⁽⁹⁾僧日蓮は、建長五年法華一派の宗門を唱道し、文応元年九月「立正安国論」を著わして、時の執権北条時頼に送った。その要旨にいわく、

「近年天変地異の害災頻りにして人民は安んずる能わざるは、邪法さかんにして、正法を信ぜざるに依り、諸天善神は此国を捨て給うなり、国王百官法華経を信ぜざれば亡滅近きにあらん」というのであった。

しかしこれは国政を批議し他宗を誹謗するもの⁽¹¹⁾として、日蓮は捕われて伊豆の伊東に流謫されたことは余りにも有名である。

次に国際的筆禍事件としては豊臣秀吉の朝鮮征伐に際し、和議を乞うて来た明使沈惟敬の奉呈した国書史に「茲に特に爾を封じて日本国王⁽¹²⁾となす」とあった。これを聴いた秀吉にわかに顔色を変じ、その衣服を脱して国書を奪って地になげうち「日本我が掌中にあり、王たらんとせば王、帝たらんとせば帝、何ぞ外奴の封を待たんや」と怒って、再征の師を発せしめたという国史上の重大事件である。⁽¹³⁾しかし秀吉はそれがために外交文書毀棄罪には問われていない。

また内乱の発端をつくった筆禍事件としては豊臣秀頼が清韓和尚をして銘せしめたいわゆる京都方広寺の大仏の鐘銘事件がある。⁽¹⁴⁾問題はこの鐘中の銘「群臣豊楽」「国家安康」の文字であった。徳川家康は家康の二字を二つに裂いたものだから「家康を呪うて命を縮めんとするものなり」とこじつけを口実にして、豊臣家を亡ぼすため大坂夏の陣を起した。⁽¹⁵⁾

- (7) 唐末におけるいわゆる安史の乱、唐室はそのため亡んだ(鈴木俊・中国史頁) 万里の長城(中国小史) 植村清二(昭56・2 中央公文庫刊一〇七頁)

- (8) 平凡社「大百科辞典」一一卷一〇二七頁

- (9) 芳賀榮達「明治大正筆禍史」一四頁

- (10) 日蓮の筆禍「立正安国論」前掲書一四頁「日本出版文化史」九九頁

- (11) 日本宗教史・笠原一男(昭39山川出版社) 二三〇頁―二三二頁

- (12) 前掲「明治大正筆禍史」一五頁

- (13) 慶長元年(一五九六年) 九月一日鈴木良一「豊臣秀吉(岩波新書一九〇頁―二〇二頁)、金熙明・日本三大朝鮮侵略史一七四頁(昭和48年9月洋々社)

- (14) (15) 前掲大百科辞典一二卷三二九頁

二 徳川幕府の筆禍に対する制裁

一 徳川氏は慶長八年(一六〇三)江戸に幕府を開き、後年和元年(一六一五)豊臣家を亡ぼしたが、爾来自家の名声を保留するに汲々として、特に旧主家豊臣家に関する記事の刊行物を禁止し、有力な歴史を抹殺した。そこで、当時の学者歴史家は、幕府の勢威をおそれて自己以外にそれらを発表しなかったため、相当の研究書も埋没されたものが多くあった。また、単に豊臣家のみならず、いやしくも古今を通じ徳川家およびその先祖以外武人の勲功なるものを説いたり、賞讃したりすることもいみ嫌って、手のとどく限り、これらの資料を抹消して、正史のあり方をくらましたのであった。⁽¹⁾ もちろん幕政そのものを批判することは絶対に禁物で、いかなる学説でも、これを戦時中ではい

流言蜚語罪で取締ることなどは朝飯前であった。

いま旧幕時代における筆禍史として、その主な筆者及著書と、筆禍の時及びその受けた刑罰を数例挙げれば、次のようなものがある。⁽²⁾ 何れも処刑は、峻烈をきわめ、専政治下の圧政ぶりがわかる。

文化六年（一八〇九）南豊亭栄助「北海異説」ロシアが北海道に入寇せし顛末を書いた秘密出版、死罪

慶応元年（一八六五）森祐信（近江国膳所藩士）「敝屣論」「勤王論」切腹

元祿七年（一六九四）鹿野武左衛門（講釈師）「鹿の巻筆」流刑

元祿四年（一六九一）山口宗倫「百人男」死罪

元明七年（一七八七）御厨屋大作「田沼意次伝記」⁽³⁾江戸払・大阪三郷払

貞享四年（一六八七）熊沢蕃山「大学或門」籠舎（禁錮）

嘉永六年（一八五三）高松其浚「正学提要」三冊 武家奉公構 浪人

天保八年（一八三七）歌川芳虎筆「御代の若餅」一枚摺

これは信長と光秀とが餅をつき、秀吉がそれをのし、家康は坐してその餅を食っている図芳虎及板元に対し各手鎖五十日、板木焼棄、

天明七年（一七八七）林子平「海国兵談」⁽⁴⁾板木破棄、蟄居、

寛政四年（一七九三）林子平「三国通覧」蟄居、

元祿十一年（一六九八）江戸書肆鱗形屋板「太閤記」七卷 絶板

（１）・（２） 小林善六日本出版文化による

わが国における風俗犯罪取締りの史的考察（一）（馬屋原）

(3) 江上照彦・悲劇の宰相田沼意次(昭五七・四教育社刊)一〇頁

(4) ドナルド・キーン原著、芳賀徹訳日本人の西洋発見(昭五七・5・10中央公論社刊)六四頁―七三頁

二 以上に述べたように、わが国古来の筆禍史は、やはり外国のそれと同じようにすべて、政治批判乃至は為政者に対する名誉毀損、不敬罪の事項に関するものばかりであって、いわゆる風俗犯罪にはちがいないが、猥せつとか、好色に関するもので処刑されたという例は、少くとも徳川幕府以前においては寡聞にして見当らない。

けだし洋の東西を問わず、為政者は庶民の政治批判を禁ずるためにはむしろ、猥せつ好色を暗に奨励したと見てよい。庶民にしてからが、なまじ、真面目に政治を批判し、意見を述べることによって、処罰されるよりも、むしろ面白おかしい猥談や猥文猥画に打ち興ずる方が無事だからである。⁽⁵⁾その傾向は徳川旧幕政当時に至っても同様であつて、⁽⁶⁾いわゆる江戸文学の真ずいは、川柳や、卑わいな読み本となった好色文学であるといわなければならぬ。何んといかに江戸時代には好色物が多かったことか、これは皆政治批判の逃避所となったからであった。

(5) 清水朝雄訳原著レオ・シドロウイチ「性の残虐史」一九五頁

(6) 藤懸静也「浮世絵」八頁

三 さて、この好色文学の挿画や又は単独の絵画として、風俗史上忘れてはならないものに浮世絵がある。

慶長年間岩佐又兵衛なる者が、織田信長の子信雄に仕え、画を好んで、よく当時の時世の風俗を写したので、浮世又兵衛といい、彼を浮世絵のらんちょうとして発達し元禄年間にいたり、菱川師宣がこれを大成しその後丹絵という派手なものから、明和年間に至り、彩色摺から、東錦絵の出るに及んで、文化文政に至り、隆盛の極に達し

た。

そうして、この浮世絵は、当時の時世粧を直接画いたものであるから、時の世態風俗に最も密接な影響があり、社会が著侈淫靡の風に流れた時代には、浮世絵も著侈の風に赴き、意匠に技巧に、何れもぜいを凝らした作品を生んだ。

そしてかくの如く浮世絵は、絵画として独特の存在であったばかりでなく、その画くところが能く社会生活に密接していたので、庶民階級の重要な娯楽であった演劇や戯作文学と結びつき、浮世絵が、その仲立となって、社会の時相をありのままに写した。その結果遂には画に託して社会を風刺し、幕政を批評する浮世絵師を出すようになった。

浮世絵すなわちあぶな絵という考え方から、それは、一体に淫靡の風俗を写したもののように見なされ、風俗壊乱の名の下に時の法令によって、しばしば、版元が弾圧処刑を受けたことが伝えられている。がそれはずっと後のことで、少くとも初期には今日でのいわゆるエロとか猥せつということだけで処刑されたものは案外少なかったのである。つまり、明治でいえば、旧治安警察法十六条にいわゆる安寧秩序をみだし、もしくは風俗を害するおそれあるもの、言いかえれば、公序良俗に反するというこのために、幕府から制裁を受ける者が多かったのである。

例えば、幕府に關係ある事柄を画くとかあるいは大奥の秘事を公にしたとか、又は幕府の失政を諷したとかいうことがその主な理由であつたらしい。

この旧治安警察法第十六条は、わが国でも戦時中などは、しばしば濫用され、東条の漫画を画いてもこれで取締りをうけた。

いわんや、幕政当時のことであるから、風刺画を弾圧するようなことは朝飯前であつた。いま浮世絵が政治批判の

為に弾圧された二、三の例を披瀝して、幕政時代の専制ぶりをしのぶよすがとする。

英 一 蝶

英（はなぶさ）⁽¹⁾ 一蝶は、浮世絵師としては極めて初期に属する画家であって、初めは信香又潮潮と号した。一蝶とは後の名である。諸芸に通い書をよくした。

その潮湖時代の作品である元禄十一年絵本「百人女藪」の板行が槍玉に上ったわけである。それは百人女藪中貴人美女の小舟中に鼓を打つの図が、当時噂の高かった將軍綱吉とお伝の方との遊興を暗に諷したものと推断されたがためであった。

遂に本石町三丁目村田成兵衛、仏師民部の版元等と共に、同年十二月「伊豆大島」に流されたとなっているが、三宅島、或は八丈島とも言われている。それ以来謫居して島に止まること実に十二年であったという。⁽²⁾ あたかも宝永六年九月前裁の草花に蝶の戯れるを見つつあった際、たまたま、赦免の報に接したので、一蝶と改名したと伝えられる。一蝶と改名後、例の「浅妻船」を画いて世の称讃を博したが、やはりそれは前の百人女藪の改作なのであった。

（1） 一六五二—一七二四年大阪の人、藤懸静也・浮世絵八〇—八一頁

（2） 大百科辞典一一卷三四頁

喜多川歌麿

歌麿は人も知る浮世絵師稀れに見る美人画の名手である。

この歌麿入獄のことは、文宝堂の「筆まかせ」に載るところだというのが、法橋玉山の絵本太閤記が好評を博したというので、その趣向にならない、豊国、春英、春亭等と共に、判じ絵として「太閤洛東吾妻遊」と題する豊太閤の朝鮮における遊興の図を画いた。すなわち、太閤が稚児髻の美童姿の石田三成の手を取り、甲冑姿の加藤清正の側に朝鮮の美妓が三弦を弾くの図でこれが恐らく、徳川に弓を引いた豊臣方を謳歌したとても気を廻わしたのであろう。時の幕閣のにらみを受け、右勝川春英と共に文化元年五月十六日吟味中の三週間入牢、出牢の上、手鎖五十日の刑に処せられた。

版元もまた錦絵没収の上、何らかの罪を受けたこと勿論である。同時に錦絵類の出版には、すべて検閲を経べき旨の嚴重な布告が発せられた。

歌麿は、本件のため、いたく心身を勞し翌年―又翌々年ともいう―五十四歳で病没したと伝えられる。(中井宗太郎「浮世絵」(岩波新書)八七頁)

歌川国芳

国芳は、豊国門下の逸足として、赤貧の中に刻苦精勵して遂に巨名を博した。画風は品位を欠いたが、元明の画法から入って西洋の画法を学んだ、人頗る硬骨漢で、浮世絵師中最も意義ある諷刺画をものした。(日本出版文化八七頁)天保十四年、彼は源頼光が病床にあって百鬼に悩まされる図を描いて出版したところ、幕府の忌憚にふれて糺問された。これは実は時世を諷したもので、頼光は將軍家慶、四天王は閻老百鬼は、人民を指したということになっている。(中井宗太郎「浮世絵」一一一頁、一二二頁)

なるほど、当時の世相は、文政十二年江戸大火と天保三年の凶作飢饉等と天変地異相次ぎ百姓一揆各地に頻発し、江戸では打こわしが行われるという有様であった。人民が幕府の根底をおびやかすとき、將軍百鬼に悩まされる絵と間違がないとは言えまい。ここにかれ国芳は浮世絵を通じささやかなレジスタンスを試みたとみることが出来る。

（同著一二二頁）

しかし幸いにこの事件では、彼の巧みな弁解が通ったのか事なきを得たが、その後嘉永六年には、同じく諷刺画でとうとう処罰されてしまった。それは、彼の筆になる「浮世又平の大津絵」なるもので、当時の御世柄、容易ならざるを諷刺したと認められ発売禁止の上版元と共に過料に処せられた。

河鍋曉斎

降って曉斎である。狩野派より出でて浮世絵に入り、一家をなした奇行逸事の多い画人で、従って、諷逸の奇画や、諷刺の狂画を作った。たまたま明治三年十月六日上野不忍池弁天境内長蛇亭においての書画会に際し、彼画くところの「三条公が西洋人に水口をはかせ奉っている」酔余の諷刺画が時の顯官を誹毀するものと認められ、現行犯として捕縄、投獄の難にあった。

翌年正月三十日赦免となったが、さらに留ってまで、筆をとって、その時の獄中風景を画いたという。

（3） 惺々曉斎、河鍋周三郎、明治二十二年四月没、五十九歳（一八三一—一八八九年）

四 従来絵画は、宮中絵師の狩野派のように貴族の独占するところであって、平民いな庶民はそれを見せて貰うだ

けのものであった。ところが浮世絵が出るに及んでそれは、全く民衆の特に町人の芸術となった。江戸幕府の封建制によって、人間性を抑圧され自由を失った町人たちが、この桎梏のもとに苦しみ悩みながら、抑圧に抗して人間性の恢復と自由を求めたやみがたい心情の表現であったのである。今でいえば暴政に対する一種の抵抗権の発現である。⁽⁴⁾
(中井氏前掲「浮世絵」一五七頁—一五八頁)

そうしてその絵画を通じて行われて政治上の諷刺が弾圧されると、それは、当時の社会の頹廢に便乗して、はけ口を好色文学と歩調をたずさえて、遊女や茶屋女等の艶治たる女体を中心として、猥せつ、煽情的な艶色を画くに求めたことは当然であって、それが浮世絵が世界まれな芸術品として讃美される一方に於て、淫蕩の芸術として見られる所以なのである(前提)

かくして漸くこの頃から、風俗の頹廢の刑事責任が、浮世絵をふくめる好色文学に追及されに至ったのである。勿論この頃には著名な浮世絵師中、秘画(春画)によって生活を立てたり、内職かせぎをした者が出て、幕府当局は、政治批判の弾圧を好色物禁遇に乗り出したのである。

(4) 為政者の暴政に対する抵抗権の理論ローマ時代からあり、一七九三年のフランスの人権宣言(三五条)にもかかげられている。この抵抗権を憲法上の一種自由権として国民の権利に数えるのが戦後の学説である。(宮沢俊義「憲法」Ⅱ二三三頁以下)

三 徳川時代に発禁になった出版物

徳川時代に発禁処分になった出版物の主なものを出禁の対象事項別に分類すると次のようなものがある。

わが国における風俗犯罪取締りの史的考察(一)(馬屋原)

1 キリスト教に関するもの

徳川幕府は、豊臣秀吉の遺業をつぎ、キリシタン宗義の布教伝導に関するものは、邦土侵略の意図あるものとし、たとえ布教専門の書でなくとも、天文書、算術書のようなものでも、その内容に天主、耶穌のことがしるてあればことごとくその書籍の売買閲読を厳禁した。

○寛永七年(一六三〇年) 西学風外三十三種(日本出版文化史)二七六頁

○元祿十一年(一六九八年) 八月天学初函、天学原本等三十八種、これは大阪町奉行所から国禁書として大阪の書林一般に申渡されたという(前掲三三九頁)

2 政治批判ないしは名誉毀損に関するもの

○慶安二年(一六四九年)「古状揃」出版元、大阪書肆西村伝兵衛

これには、今川状、義経含状、弁慶最後書捨直二貫送状、大阪進状、腰越状等を集録したもので、時の徳川幕府の先祖たる鎌倉幕府に対する反逆的言辞が集めてあるものとして、絶板のうえ、出版元西村伝兵衛は斬首刑に処せられた(前掲)

○延宝元年(一六七三年)「古今人物志」宇都宮遯庵著書中の関ヶ原に関する記事が忌諱にふれ、著者は郷里周防国岩国に幽閉された。

○天明八年(一七八八年)「文武二道万石通」明誠堂喜三三著、喜三三は佐竹藩士・本名平沢格、時の考中松平定信を畠山重忠に擬して、彼の諸政改革と文武二道奨励を諷刺したものとして、絶板を命ぜられた。

○天保八年十二月(一八三七七年)「御代の若餅」歌川芳虎画、これは一枚摺の武者画であるが、信長と光秀が餅をつ

き、これを秀吉がのし、家康が座してその餅を食うの図である。

絶板のうえ、画家芳虎は手鎖五十日の刑に処せられ、板木焼棄のうえ板元も処罰された（前掲）

○天保九年（一八三八年）「扶桑国考」平田篤胤著、平田篤胤が勤皇のことを説いたもので朝廷に献上され、その志を嘉せられた。やがて、これを端緒に皇道に関する思想が天下にび蔓するにおよんでその大義名分の説が幕府の忌諱するところとなり、儒臣林家一族のために絶板を命ぜられた（前掲書六七四頁）

3 裁判批判に関するもの

当時の裁判批判のかどで処罰されたものとしては、宝暦八年（一七五八年）「森の雫」馬場文耕著がある。これは、著者文耕は伊予の人と言われる僧侶あがり還俗して江戸に来たり、軍談講釈師となったもの。かたがた著述を業としたが、たまたま、夜講の際、珍書「森の雫」と題して、当時世評高かった金森一件の由来を口演し、その訴訟まだ落着しないのに、私に想像擬判の裁断を下しあまつさえ、その筋を一小冊につづって「平仮名森の雫」と題し毎夜一冊ずつ聴集に売りさばいたり、貸本屋に貸出して流布させたというのであった。⁽⁵⁾文耕は逮捕尋問を受けるにおよんでもごうも憶する色なくしきりに当時の弊政をのしり、そのうえ、今度の金森事件では、係役人の瀆職の嫌疑ありとして、堂々個条をあげて陳弁した。為に町奉行によりついに引き回しのうえ、獄門の刑に処せられた（田村栄太郎「実説小説考」六四頁）

(5) 英の法廷侮辱罪 Contempt of Court — 法廷の内外に及ぶ — にあたる

4 不敬に関するもの

わが国における風俗犯罪取締りの史的考察（一）（馬屋原）

享保七年「万暦全書」菊本嘉保著、この中で徳川家康、二代將軍秀忠等の筆跡を掲出してあるので神君上をはばからない不敬行為だとして絶板となった（前掲書三七四頁）

5 流言飛語に関するもの

元祿七年（一六九八年）「鹿の巻筆」鹿野武左衛門⁽⁶⁾。これは夢物語として、コレラ流行の厄除けには、南天の実と梅干をせんじて飲めばよいとて、ゆえなき事の妖言を記述して人心を狂感させたというのがで時の町奉行より、著者は伊豆大島へ流島処分に処せられた（前掲三三六頁）

（6）江戸咄本作家のち許されて江戸に帰ったが間もなく死去（昭56年日本人名辞典（三省堂）五三五頁）

四 徳川時代における言論出版禁令

徳川時代における言論出版の禁令は、このようにそれは政治批判を中心としての個々の場あたりのごつごう主義であったが、諷刺による政治批判が禁ぜられるにいたるや、民衆のうつぶんのはけ口は、みずから淫靡わいせつの世界に逃避せざるをえなかった。そこで幕府は世上淫靡の文書図画ははんらんするにおよび、ついに総合的出版取締令を發布するにいった。 （徳川期には今の出版を出板ともいう）

享保七年（一七三二年）十二月七日布令の読売禁令と同年四月十六日布令の出版令がすなわちこれである。いずれも時の南町奉行大岡越前守の布告である。

この二令は、当時幕府の儒教を主力とする享保肅正政策の一環として、美風良俗の樹立ということから出されたも

のである。それは実に元祿以来、近松門左衛門による情艶な好色物、さては浮世絵による春画春本の類のはんらんを押えて、出版物による風俗の矯正をはかうとした最初の試みであって、わが国出版に関するまとまった処分法のはじめであり、かつわいせつ文書图画取締りのらんちようと見るべきものである。

(1)(2)(3) 吉田暎二「浮世絵談義」一一八頁前掲「出版文化史」三六九頁

この布令によって、書籍商の仲間、いわゆる組合なるものが組織され士分の者の出版物以外の庶民による出版物はすべて、この仲間の中から各他家が吟味役として行事にえらばれ、奉行所の布達や禁書の取締りに任じた。もし発禁に付すべき嫌疑ある出版物は原稿を「廻りもの」として、仲間の賛否を問わせるという、専制時代の取締方法として⁽⁴⁾は、すこぶる民主的な執行に任せたのである。

(4) 前掲文化史三六七頁、三七〇頁

この布令は俗に御条目と称し、明治維新まで、長くわが国出版取締りの根本法となり、明治新政府当時における出版に関する布告条例等にまで受けつがれたもの。やがて、これが後の新聞条例や出版条例の前駆を為すものといえよう。

左にその全文を示すと、

読売禁令（享保七年二月七布令）

わが国における風俗犯罪取締りの史的考察（二）（馬屋原）

当節世上に有_レ出_レ無之噂半亦男女申合相果候類を心中と申板行いたし読売候儀前々よりは停止之処此間猥に売あるき候段相聞工不届に候自今捕方之もの相廻し召捕度曲事に可申付候ケ様之類者見当り次第其町々に而も捕置月番之番和工可申来候若見遁しにいたし捕方之もの召捕候はゞ其町の名主月行事まで急度可_ニ申付_ニ候間此旨可_ニ相守_ニ者也これは心中物の読売を禁止したものである。

出板令（享保七年十二月十六日布令）

一、自分新板書物之儀儒書、神書、医書、歌書都而書物類其筋一通り之事は格別猥成儀異説等を取交作り出し候儀堅く可_レ為_ニ無用_ニ事

一、只今迄有来候板行物の内容好色本の類は風俗之為にもよろしからざる儀に候間早々相改絶板可仕候事

一、人々家筋先祖の事などを彼是相違の儀とも新作の書物に書顯し世上の致_ニ流希_ニ候儀有_レ之候段自今御停止に候若右の類有之子孫より訴出においては急度吟味可有之筈に候事

一、何書物によらず、此以後新板の物作者並板元の実名奥書に為_レ致可_レ申候事

一、権現様之御儀は勿論惣而御当家の御事、板行書本今より無用に可_レ仕候無_レ抛子細も有_レ之は奉行所之訴出指図可申事右之趣を以て自今新作の書物出来候共遂吟味可_レ致商売_ニ若右定に背候有之ば奉行所之可_ニ訴出_ニ候経_ニ数年_ニ相知候共板元問屋共に急度可_ニ申付_ニ候仲ケ間致_ニ吟味_ニ違犯無_レ之様可_ニ相心得_ニ候この出板令の内容を総括すると

- (1) 儒書、神書、仏書等はすべて通説を述べみだりに異説を述べることを禁ずる
- (2) 従本刊行せる好色本の絶板を命ずる
- (3) 他人および他家に対する名誉毀損を禁じ、子孫の告訴があらば嚴重に取調べる。

(4) 著者、出版元は奥書に実名を明にすること。

(5) 幕祖徳川家康および将軍家の事跡に関する著作の一切を禁止する

(6) その他新作図書はすべて仲間吟味に附すること

というのであって、(1)と(5)は従来から政治的意図のもとにたつ出版取締り方針を明文化したものであり、(3)は人名譽という人権の尊重を出版取締り上の一目標たらしめたところに文化的意義をもっており、(4)は偽名または隠し名による著者および出版元の脱法行為を禁ずる為のものであり、そうして(6)は取締りの俎上にのぼらせる出版物はすべて仲間すなわち書物組合の自治的検閲に任せるという民主的な取締りの在り方を示している。なお、さきの延宝元年の出版官許主義は本令によれば一転して官許を得ずして私に出版を許していることがわかる。

しかし、なんとしても、この布令の大きな眼目は、いままでフリであった(2)の好色本すなわち壊乱ないしはわいせつ文書図画の全面的追放であった。しかも、それが既刊のものすべてにおよぶというのであるから、そのために卑わいの挿絵のあるものはもちろん絶板になったが、そうでないものの好色本でもカムフラージュのためか既刊の書名を改題して、秘戯の二字を削ったものが相当出た。たとえば、井原西鶴の「好色一代男」(貞享元年)は「諸艶大鑑」と改められ、同じく「好色五人女」(同三年)は「当世女容気」となり「好色盛衰記」(元禄元年)は「西鶴栄花話」とそれぞれ改題された。乞う後世の読者にして、同じ著述を書名が異なっているからとて、誤解紛交されないことを。

(5) 浮世絵師はお上の目をしのぶ仮りの名すなわち陰名を用いて春面を描いたという。その数はひとりで数個あったという。出版元も陰名を必要としたという(吉田暎二「浮世絵談義」三二頁)

(6) 前掲文化史 三六九頁

本令布告発令の翌年絶板のやりだまに上がったものに、享保八年（一七二三）西川裕信の筆にかかる「百人女藤足定」であった。祐信は京都の浮世絵師で好色本枕絵の達人といわれた祐信が宮廷の隠し事を描いたものである。やんごとなき雲の上人の姿をつがい絵に図し、あるいは、玉れんのうち、枕席、閨房における密通の態をあらわしたものとして、不敬、わいせつの双方のとがで、絶板となったという（前掲文化史三七二頁）

かくして、この享保の禁令によって、最も大きな打撃を受けたのは、当時頽廃の極に達した浮世絵を主体とするこの種好色本秘戯画（春画枕画）であった。この春画に名を得た画家には、祐信のほか春信、春章、北斎、歌麿、清長、広重、国貞、英泉等々がある。かくいえばほとんどあらかたの浮世絵師は多かれ少なかれ春画の筆を染めない者はないといつてよいようである。⁽⁷⁾

（7） 吉田氏前掲浮世絵談義 一〇九頁

ただ陰名を用いているから、案外無名氏が描いたように思われているだけである。そういうわけで、浮世絵といえはほとんど秘画をさすがごとく思われがちであるが、実際には享保七年以来は公刊を禁止されたためか今日残存する浮世絵や美人画に属するもののうち、わずかに一割にも足りないということである。（吉田氏「浮世絵談義」一〇八頁）

浮世絵における秘画が、男女交合の態を露骨に描いたものであることによって、それは判例のいわゆる「性欲を刺激興奮せしめ人をして嫌疑羞恥の感情をもよおさしめ」るものであることにおいて、今日の刑法第一七五条のわいせつ図画であることは言うまでもない。だから、これを頒布、販売、陳列すればもちろんのこと、これを販売の目的をもっておれば所持する場合であっても、それぞれ同条所定の犯罪を構成する。ただ筐底深く蔵して、自己のみが娯

樂、研究の目的で、單に所持するだけで公刊しなければ何等の犯罪にはならないのである。

五 寛政、天保の風俗取締と好色本の禁止

一 享保七年の幕府の好色物禁止令に相呼して、享保十五年には書物屋仲ヶ間でも自主的に左の如き申合せをして、幕府の取締に協力した。

一、御公儀様御法度の書物並びに画本類、堅く、売買致さざる間敷く候、尤も先年御触れの通り、御諱諸家の尊等書き頭し仍新板又は好色本、風俗の為に宜しからざる書物一切持ち来買売り致さざる間敷き事。

しかし、その後猥せつ文書図幽の取締りとかくゆるみ勝ちであったものらしく、絵草紙本など極端なものが続出した。遂に老中首座松平定信執政下の寛政二年（一七九〇）には、二月と九月との再度にわたり、またまた出版好色本出版禁止令が出た。（北島正元「江戸時代」二〇四頁）

同年二月の発令の一ヶ条に曰く、

一、書物草紙之類新規に仕立候儀無用、但不叶事に候はゞ、相伺候、上可_ニ申付_ニ候、尤當時分_ニ之儀早速一枚絵等に令_ニ板行_ニ商売可_レ為_ニ無用_ニ候、右之品々有来物にても最初は其仕方_ニ之品堅候ても段々仕方を替花美を尽し濶色を加え甚費成儀に候間最初の質朴を用候様可致候且新板書物一通之事は格別猥成異説を取交作出候堅可_レ為_ニ無用_ニ候只今迄有来候板行物の内好色本の類は風俗の為によろしからざるに付段々相改絶板可致又は何書物によらず以後新板の物作者並に板元之実名奥書いたし可申旨共外品々享保年中相触候処、いつとなく相ゆるみ無用の作出令板行並子供持遊草紙絵本類に至る迄、年々無益に手を込め高値に仕立甚費成事に候前々相触候通弥、相守猶又左之趣可想得候。

また同年九月中の発令中には、

一、書物類の儀前々より嚴重に申渡候いつとなく、猥に相成候何によらず行事改之[・]絵本[・]、草[・]双[・]紙[・]類迄も風俗の爲に不相成猥がわしき事等勿論無用に候、一枚絵の類は画のみに候わば大概是、不^レ苦候、お言葉等添有^レ之候は[・]能[・]々改^レ之いかゞはしき品々は板行いたさせ申間敷右に付行事の改を不^レ用もの候はば、早々可[・]三[・]訴出[・]候又改方不行届か或は洩候は[・]ゞ行事も越度たるべく候。

の一項があつて、それぞれ好色物につき再三の発刊禁止を命じているのである。

二 これら好色本禁令の犠牲となつた当時の出版物には次の如きものがある

(1) 山東京伝著「錦の裏」「娼妖絹麗」「仕懸文庫」。

京伝は江戸深川木場の生れ本名を岩瀬伝蔵といった。この三冊は、洒落本としての一連の著作である、宝暦十一年「遊里の事を書き綴つたこと不埒なり」として、手鎖五十日の刑に処せられ、出版元なども軽追訴や、闕所処分に処せられた(出版文化史四八一頁)この「錦の裏」というのは、かの摂津神崎の遊女夕霧と遊客伊左衛門の情事ととりあつかい、また「娼妓絹麗」は、大阪新町の遊女桜川と遊客忠兵衛との情事を、江戸新吉原廓内での出来事と粉色したもので、「仕懸文庫」とは、深川辺りの料亭での遊興の態を曾我物語に擬して今様にかえ、いずれもまさしく「遊女放埒の体」を浮世絵を挿入して書き綴つたものであった。

(2) 式亭三馬著「辰巳婦言」

これは寛政十年の発刊、関東米の序、馬笑の跋、喜多川歌麿の普賢像の口絵のある小本である。江戸深川辰巳街における妓女の痴態を描写したもので風俗に害ありとて本そのものは絶板処分となつたが、著者三馬自身は何等の

制裁を受けなかったという（出版文化史四九三頁）

(3) 塩屋艶二著「南門単」

寛政十二年の発刊、内容は江戸品川の遊女と遊客との遊興の状を著作自らの筆で挿画を入れて描写したもので「遊隋放蕩を誘致せしめ」るものとして絶板を命ぜられた。

三 その後天保十二年に至るや、人情本が頗る流行して、自然風俗を乱すようになった。時の町奉行は、市内取締りに係り命じて江戸市中のいかがわしい在庫品を調べさせて全部これを目録に並べて上申させている（前掲文化史六九五頁）「絵草紙並人情本好色本等の儀につき申上候書付、市内取締り 三廻り

合本絵草紙並人情本と唱候絵入読本の儀に付人情本の儀は当月申上候処合巻草紙来春出来仕候分表紙彩色摺篇数少く減候趣には御座候得共格別篇数目立へりて候様子共不相見候且近年田舎源氏と申小冊物も年々出版出申候。

一、人情本之儀は滑稽本になぞらえ色情の義を専ら綴り好色本に紛はしき淫風之甚しく婦女子等之は以ての外風俗に違候処読本掛各主共改之詮無之追年数十篇出版差出候趣相聞候に付当年迄差出候表題並来春売出候分共若増左に申上候」

として遂一各書店の在庫品を敢えて書き出し、最後に「右人情本戯作致し候は重々春水為永と申し、神田多町越前屋長次郎と申者に有之候由且好色本は来春売出板之分余程出来いたし居候由趣右之分も多分最書各之者共仕込候趣風聞仕候之申上候以上

丑十二月 市中取締り

隠 密 廻

わが国における風俗犯罪取締りの史的考察（一）（馬屋原）

定 廻

臨 時 廻

これは当時のいわば特高警察官の上司宛報告書のような形式になっている。

この天保年間に筆禍事件として罪を問われた有名な事件に、同じく天保十年十二月中の渡辺華山(田原藩士)の「慎機論」と高野長英(町医師)の「夢の物語」があるがこれは何れも政治的誹謗罪であるから、ここには深く触れない。

四 かくして、天保十三年六月、蕩々たるこの淫風に眼をそむけた時の閣老水野忠邦起って、弊政を一掃する為、奢侈と好色の追放を旗印として風俗匡正に乗り出し、さきの享保寛政の出板令の趣旨を、一層厳しくし好色禁止の線を強く打ち出したものである。(北島正元「江戸時代」二二二頁)

水野、老中就任は天保五年(一八三四)であったが、將軍家家斉生前中は改革をはばかり、一二年その死を契機として断行したのである。(中井宗太郎「浮世絵」九四頁)

その(一)は同年六月、浮世絵、草双紙に関するもので、絵草紙掛り名主宛となっている。

「錦絵と唱え、歌舞伎役者、遊女、女芸者等を一枚摺に改候儀風俗に拘り候筋に付開板は勿論、是正仕入置候分は決して売買致間じく、その近外来合巻と唱候絵双紙之類絵柄等格別入頼重に役者之似顔、狂言の趣向等に書綴其上表紙等包之彩色を相用い無益の手数に掛け高値に売出し候段如何之儀に付、是亦仕入置候分共決して売買致間じく候、向後似顔又は狂言の趣向は相止め貞節を之立に致し兒女勧善之ために相成候書綴絵も際立程省略致し無用の手数相懸急度改め、尤表紙上包等へ彩色相用候儀は堅可_レ致_二無用_一候、尤新板出来之節之町年寄館市右門方へ差出改受可_レ申」とあり。

その(二)は同年七月の人情本に関するもので、近來人情本と唱候書流行候処右は風俗に拘り不宜に付本屋共所持之本に板木とも取上候間以來売買貸借等決て令_レ停止候事」というのである。

これによって、いやしくも浮世絵や人情本は、発売は勿論のこと、從來の在庫品の所持、売買譲渡まで一切を禁止されるに至った。またこれまで、出版物は原則的には私的自由出版であったものが、今後は新作物はすべて町年寄館氏(世襲書物吟味役)を経て幕府に伺いを立てて指図を受けさせるという全面的官許主義を確立したことになる。

これらの禁令のきびしさは、風俗の取締りに名をかって、江戸文学に弾圧を加えたものとされているが(北島正元「江戸時代」二三〇頁)その槍玉に上った主なものは、柳亭種彦の「田舎源氏」と為永春水の「春色物」等であった。

柳亭種彦は、もと旗本で高屋彦四郎と称したが、「源氏物語」を当世にとり、「偽紫田舎源氏」と題して柳営の秘事を書き綴った。つづいて、「水揚帳」と題する純然たる春画本をかいた。天保十三年六月奉行所に召喚され、取調中翌七月病を發して死んだといわれている。行年六十(出版文化史六九二、三頁)

為永春水は、さき頃の密告書に注意書きされている通り、その著作最も多く「春色梅曆」「春色辰巳の園」「春色恵の花」「春色田舎の花」「春告鳥」「春色籬の梅」等と、その殆んどが自己の称号にちなむ春色か、しからずんば春の字を附したもののばかりである。今日では文章がむつかしく猥せつ感は稀薄であるが、当時はありの儘の風俗情感を写した、いわゆる春画春本のたぐいであって、風俗壊乱の猥せつ文書図画として、同年六月十一日、江戸北町奉行遠山左衛門係りで次のような言渡しを受けて手鎖の刑に処せられた。

神田多町一丁目五郎兵衛店

為永春水 事 長次郎

其方儀絵本草紙の類風俗の為に下相成猥々間しき書又は異説等書綴り作出し候儀無用致可旨町触に相背地本屋共より誂へ候とて人情本と唱候小冊物著作数右之内には婦女の勸善にも可相成と心得違致不来の事ども書願し剩へ遊所放蕩之体を絵入に仕組遺し手間賃請取候段不埒につき手鎖申付ける

というのである。ちなみに、版元が処刑され絶板になったことはいうまでもない。〔前掲出版文化史〕……六九九頁―七〇〇頁）